

山尾三省さんが亡くなって数年たつが、詩集やエッセイ集がかなり注目されている。

屋久島が有名になったのも、その地を終の棲家とした三省さんの影響が、少なからずあると思われる。

たまたま、夫が18歳でフーテンだったとき、31歳の山尾三省さんといっしょに与論島で暮らしていた時期があるという。今から40年くらい前のことだ。

暮らすということは、四六時中を知るということだから、おそらく三省さんの凡人の面、裏の面や愚かな面も見たということだろう。人間だから、当然そういう多面性があると認めざるを得ないのだが、夫には詩人・山尾三省がずっと胸に落ちないらしい。

これは、山尾三省さんに限ったことではなく、宮沢賢治の奇人変人たるを知る盛岡の親せきや、野口英世にお金を貸して返してもらえなかった知人にしても、世間での評価と異なる斜めの視点をかかえて、ずっとノウと言いつづけなくてはならない近親者の苦悩にほかならない。

わたしはかつて、人間を全人格的に見ないということ、イスラエルで学んだ。これは、自分にとって大事なものさしだと思っている。

どんなにすぐれた音楽家、画家、作家、学者であっても、それはその分野でのみすぐれているのであって、全人格として〈すばらしい〉と評価するべきではないとおそわった。また逆に、自分がなにかの分野で認められたとしても、それは自分の全人格に対する評価ではないと知るべきだった。

〈聖老人〉というのは屋久島の縄文杉のことで、山尾三省さん自身のことではないのに、いつのまにか世間では、三省さんが聖なる人だったかのように錯覚評価しているのは、三省さんご自身も、けっして喜んではいないと思う。

ある日、夫が図書館から三省さんの著書を借りてきたらしく、店のカウンターに数冊積んであった。夫も、いよいよ歳をとったのだなと、わたしはうれしく思った。